

かゑらじと かねて思へハ 梓弓

なき数に入る 名をぞとどむる

四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第123号

令和3年2月9日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

尊氏に翻弄され、義満の傀儡、北朝の天皇

廃位・幽閉の憂き目の中、後小松時代に皇統継承

● 北朝内部でも嫡流・庶流の抗争 ●

正行といえば吉野朝廷であり、後醍醐、後村上、長慶、後龜山と続くが、対する北朝の天皇、光源・光明・崇光・後光源・後円融・後小松について、あまり触れることがなかったので、今回取り上げる。

一言にして言えば、足利尊氏に翻弄され、義満に実権を握られた天皇たちと言える。幕府と吉野朝＝楠氏の対立抗争の中であって、行在所は定まらず、廃位・幽閉の憂き目にあうことになる。

大覚寺統と持明院統の対立は誰もが知るところだが、北朝・持明院統にあっては、光源の嫡流（崇光）と庶流（後光源）の対立抗争もあった。そして、義満時代、北朝庶流の後光源系に皇統は一本化されるが、称光に皇子生まれず、皇統は、嫡流崇光後衛伏見の宮・後深草嫡流の後花園に代わることとなり、結果、南北朝時代の覚寺統・吉野朝皇統、北朝主流・後光源系皇統はともに断絶する。

なお、正行活躍時代の北朝天皇は光明のみで、延元元年1336から正平3年1348までの12年間は、正行、河内東条平和の時代が長く続いたが、北朝にあっても比較的穏やかで、光明治世に大きな変化はなかった。

□ □ □

北朝1代、光源天皇は、在位2年間で、後醍醐が隠岐から戻り建武の新政をした関係で、捕らえられ、廃位の憂き目にあう。

北朝2代、光明天皇は、建武の新政に失敗し後醍醐が比叡山に退いたのち、三首の神器のないまま光源上皇の詔宣を証として即位する。在位12年間。

北朝3代、崇光天皇は、在位3年の間に、観応の擾乱が起こり、そのあおりを食って正平の一統によって、廃位の憂き目にあう。北朝の光源、光明、崇光の3上皇と、

直仁親王は吉野に幽閉され、北朝の天皇不在時代に入る。

正平7年、足利義詮が北朝を再興すると、後光源天皇を即位させるが、三首の神器も譲位を決める上皇も不在のまま、継体天皇の例に倣って群臣議立によって擁立された。

北朝4代、後光源天皇時代の正平22年、義詮が死去すると義満が3代将軍となり、細川頼之が管領として補佐する。

北朝5代、後円融天皇は12歳で即位、持明院統の嫡流・崇光上皇（光源天皇長子）と、庶流・後光源上皇（光源天皇2子）の確執と皇統継承問題に悩まされる。

北朝6代、後小松天皇は6歳で即位するが、義満の傀儡天皇であった。義満の幕政が安定し、権勢を極めると、吉野朝を完全に制圧し、南北朝が合一され、後小松に三首の神器がもたらされ、晴れて100代の皇統を継承する。

以上、簡単に北朝の天皇の動静を見たが、それは、足利尊氏に翻弄され、足利義満に実権を握られた天皇たちであったと云え、行在所も定まらず、三種の神器もなく、正式な皇統とは言えない状況が長く続いた。

3上皇は、吉野に幽閉の憂き目にもあい、一時、金剛寺で吉野朝・後村上天皇と同居するという時期もあった。

正行との関係では、正行の活躍時代、北朝の天皇は光明天皇だけである。

北朝の天皇に、皇統の証はなく、足利氏の傀儡天皇で、南北朝時代というが、現実には、「足利幕府」と、「吉野朝」＝楠氏、対立抗争の時代であったといえる。正行の知りうる天皇は、光源と光明の二人。しかし、接点もなく、おそらく無縁の存在であったと思われる。

正行が仕えた天皇は、後醍醐と後村上で、吉野朝を支える武将は、正行時代、ほぼ唯一正行一人の状態であったと思われる。「物」「心」両面で支え続けたのが正行であった。

天皇	和暦	西暦	北朝の動き	吉野朝・楠氏の動き
光源①	元弘元年	1331	9月20日、光源天皇即位 元弘の変で、後醍醐天皇出京後、幕府によって擁立	後醍醐、隠岐配流
	元弘3年	1333	尊氏、六波羅探題襲撃	
		1333	5月25日、捕らえられ、後醍醐によって廃位させられる	
後醍醐による建武の新政				
光明②	延元元年	1336	尊氏入京し、後醍醐が比叡山に退いた後、光明天皇即位 この時、三種の神器なく光源上皇の詔宣を証とする即位	湊川の戦 12月、後醍醐吉野に入り、南北朝時代始まる
	正平3年	1348	10月27日、讓位し、上皇となって院政を敷く 10月27日、即位	四條畷の戦い
崇光③	正平5年	1350	直義、京を脱出、大和で拳兵 観応の擾乱勃発 ～尊氏と直義の内紛／高師直の失脚	和睦の可能性① 直義吉野朝降伏のとき
	正平6年	1351	10月、尊氏、吉野朝に投降し、直義追討の綸旨受ける 11月7日、吉野朝、崇光天皇と直仁親王を廃位	和睦の可能性② 正平の一統のとき
正平の一統				
天皇不在	正平7年	1352	1月、尊氏、鎌倉の直義を討つて、入京 直義、2月、毒殺される	後村上、住吉行宮に入り、八幡に行幸
			正平の一統は破れ、義詮近江に走る	正儀、京都で義詮に勝利 2月、吉野朝、京を回復
	光源、光明、崇光3上皇と直仁親王、吉野に幽閉			
			3月15日、義詮、京を奪還	4月、男山八幡行宮築ちる ～太平記、正儀批判
			8月17日、義詮の北朝再興と同時に、後光源天皇即位 この時、神器も讓位を決める上皇も不在のままの即位～群臣議立(継体天皇の例)	
	正平8年	1353	6月、正儀に攻められ、義詮に奉じられて美濃国小島に逃げる	
	正平9年	1354		北畠親房死去
			12月、直義の子、直冬、南朝に降伏し、京に攻め上がる ～尊氏に奉じられ、近江に逃げる	
	正平10年	1355	光源、光明、崇光3上皇と直仁親王、金剛寺に幽閉	後村上天皇、金剛寺摩尼院を行宮に
			2月～3月、京都争奪戦で、尊氏・義詮、京を奪い返す 光源、光明、崇光3上皇と直仁親王、京都に帰還	正儀、河内東条に帰還
正平12年	1357		正儀、左馬守に任じられる	
正平13年	1358	尊氏、義詮に將軍職譲る	金剛寺行宮で、正儀・正武「天の時、地の利、人の和」奏上	
正平14年	1359		12月23日、後村上、観心寺に行宮を遷す	
正平16年	1361	吉野朝の京都侵攻作戦で、義詮に奉じられて近江に走る	吉野朝反撃、正儀「京都奪回無益論」	
正平17年	1362		正儀、神崎で勝利	
正平21年	1366	和睦の可能性③ 正儀と吉野朝公卿に温度差	正儀、佐々木道譽と和睦交渉	
正平22年	1367	12月、義詮死去し、義満3代將軍に 細川頼之管領として補佐		
正平23年	1368		3月、後村上天皇、住吉行宮で崩御	
正平24年	1369	和睦の可能性④ 細川頼之、和睦交渉を推進、吉野朝側の反対	1月、正儀、北朝に降る	
建徳2年	1371	3月23日、讓位し、院政を敷く 3月23日、即位		
後円融⑤	天授5年	1379	義満、細川頼之を罷免四国追放＝康暦の政変	正儀、頼之の失脚後、北朝内で孤立
	弘和2年	1382	～崇光上皇と弟・後光源上皇の継承争い続き、確執残る	
			～義満の幕政安定し、権勢を極める	
			4月11日、讓位し、形ばかりの院政を敷く	
			4月11日、即位	
		～義満の室町殿に移り、親王宣下を受けることなく即位／6歳		
後小松	元中9年	1392	明德の乱で、幕府勝利	
			～山名一族、吉野朝にくみし京都進撃	正儀の子、正勝・正元、千早城に籠るも陥落
			～紀伊の鎮定作戦で、吉野朝を完全に制圧	
			～圧倒的な北朝優勢下、義満、南北講和を申し入れる	10月2日、後亀山天皇、京都に還幸
			10月5日、後亀山から三首の神器を得て、皇統を継承	和睦の実現⑤ 義満の独断とリーダーシップ
	南北朝合一			
			義満、公武両権力の頂点に立つ／権勢は天皇をもしのぐほどに	
応永元年	1394	義満、將軍職を義持に譲るも、政治の実権を握る		
応永9年	1402	明との交渉文に、義満「日本国王」と記される		
応永19年	1412	8月29日、讓位し、上皇として院政を敷く		